

外国貿易の効果と収益性

鈴木重靖

はしがき

社会主義国の外国貿易が、一般に社会主義国民経済に対してどのような効果(性) *Effektivität des Aussenhandels* あるいは効用 *Nutzen des Aussenhandels* 乃至利用効果 *Nutzeffekt des Aussenhandels* をもっているかという点と、またこれと直接関聯して、社会主義国の外国貿易の国民経済的収益性 *volkswirtschaftliche Rentabilität des Aussenhandels* とは何であり、これはどのようにして算定されるかという問題は、最近外国貿易の意義が増大してきた社会主義諸国にとって、かなり重要な問題となっている。本稿はこのような社会主義国貿易の効果や収益性の問題が、社会主義陣営の中でも経済的に特殊の地位を占めている中国においてどのように考えられ、また現実の中国の貿易の発展及び構造とどう結びついているかを検討し、論述しようとするものである。

もっとも中国は経済相互援助会議に参加している東欧諸国と違って、外国貿易に依存する程度も低く、右の問題に対する研究も東欧諸国にくらべ少くとも量的にはかなり劣っている。またこの問題に限らず、一般に外国貿易に関する理論的研究及び実証的歴史的資料が少い。このような制約も手伝って、本稿は整備された論文というより一つの試論的な覚え書の論述とならざるを得なかったことをお断りしておく。

資本主義貿易がその国の国民経済乃至資本に対してどのような効果をどれだけもたらすか、ということについては、比較生産費原理や国際価値あるいは交易条件の問題と関聯して、ふるくから外国貿易の利益 Gain の問題として多くの人たちによって研究され論じられてきたが、同種の問題が社会主義貿易に関して研究され問題にされはじめたのは比較的最近のことである。勿論、社会主義貿易は、この地球上に社会主義国がソ連邦一国であった時から存在しているのであり、この意味からすれば、社会主義貿易が社会主義国民経済に効果をもたらしていたことは事実である^①。しかし当時は、外国貿易の意義も小さく、この問題はいわば実践的經驗的に問題にされただけであり、またたとえ理論的にある程度問題にされることがあったとしても、少くともこれを数字的に計算するということは全く問題にされなかったといつてよい。

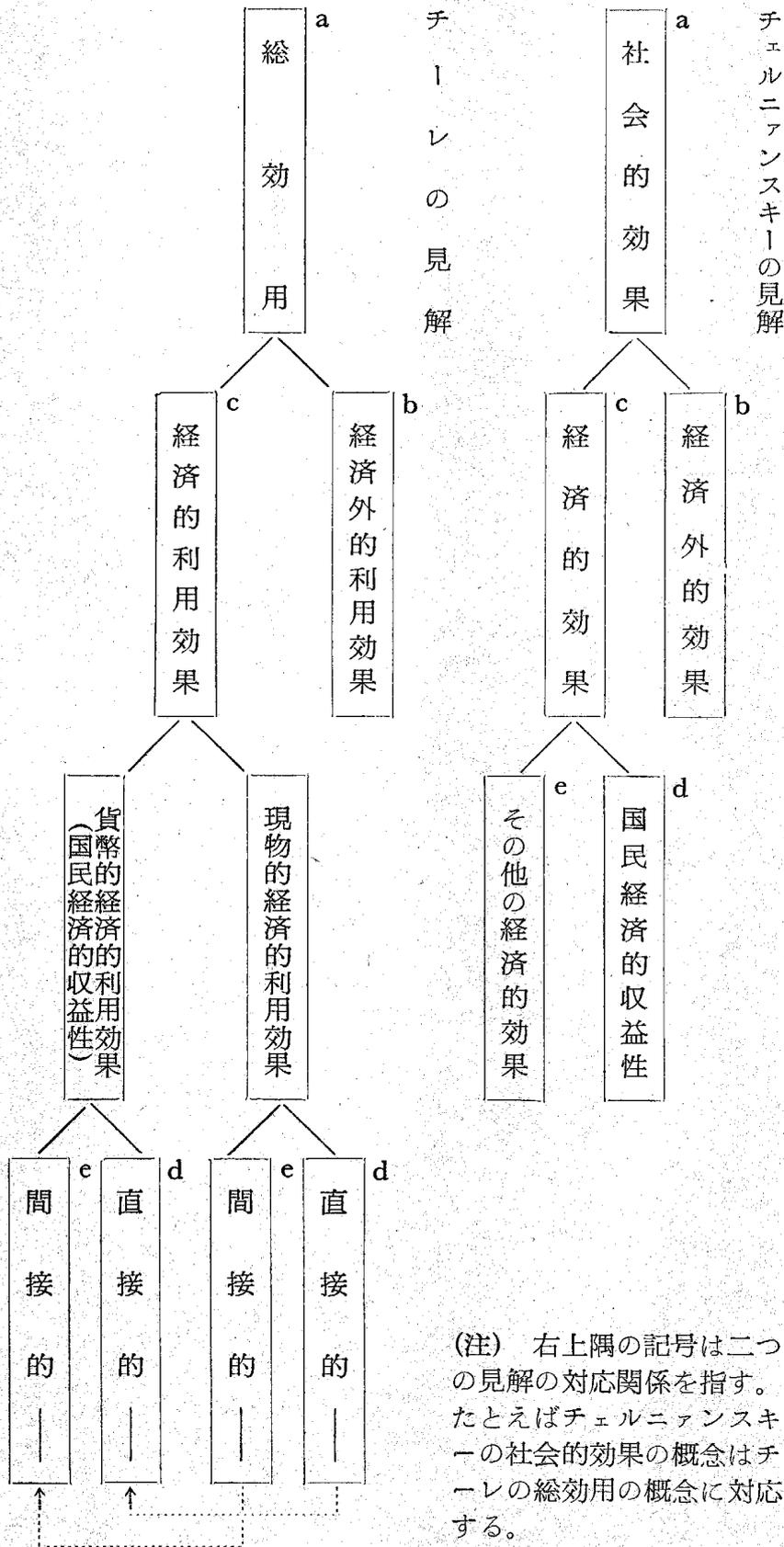
この問題が意識的系統的に論じられるようになったのは、一九五四年頃からであり、また活発に研究され論争されるようになったのは一九五七年以後である。すなわち一九五四年十月、ハンガリーのチボール・リシカ及びアンタル・マールリアスが『収益性と国際分業』なる論文を同国経済学雑誌『国民経済評論』に発表してから三年後、一九五七年にチェコスロヴァキアの V・チェルニアンスキーが一回にわたって、『外国貿易の国民経済的収益性』に関する論文を発表した。そして同年十月、チェルニアンスキーの見解を中心に社会主義諸国の経済学者たちの国際学術会議が開かれた。この学術会議を契機として、その後現在にいたるまで、ハンガリー、チェコスロヴァキア、東ドイツを中心として多くの学者、経済学者がこの問題について書き、且つ論じてきている^②。

では、社会主義貿易の効果乃至効用とは何であり、その大いさはいかにして計られるか。が、これについて私は以

前二回にわたって諸論者の見解を紹介したことがあるので、ここでは、これらの紹介論文にもれたものを補足しながら以降の理解に必要な程度に諸見解を紹介することにとどめる。その代表的見解は何といつてもチェルニアンスキのそれであろう。彼によると外国貿易の効果には四つの段階があつて、その第一は、社会的効果(性) *Gesellschaftliche Effektivität des Aussenhandels* である。これは最も包括的な概念であつて、外国貿易が社会主義社会に対して果す効果であり、経済的及び経済外的な多くの要素によって規定される。これらの要素の多くは数字的に表現しえない。第二は、経済的效果(性) *ökonomische Effektivität des Aussenhandels* である。これは社会的効果よりも狭い概念であり、経済的要素だけに限られる。第三は外国貿易の国民経済的収益性 *volkswirtschaftliche Rentabilität des Aussenhandels* である。これは経済的效果の一構成部分をなすものであつて、その内容とするところは、外国との商品交換によつてもたらされるところの社会的労働の節約程度を示す。第四は、外国貿易の実務的処置に関する収益性である^④。

またR・チーレによると外国貿易の効用は三つに大別される。その第一は総効用 *Gesamtnutzen des sozialistischen Aussenhandels* であつて、これは経済的及び経済外的効用を含む。チェルニアンスキの社会的効果に大体相当する。第二は経済的利用効果 *ökonomische Nutzeffekte des sozialistischen Aussenhandels* とその貨幣的表現としての国民経済的収益性である。経済的利用効果とは外国貿易によつて社会の総生産が増加することあるいは剰余生産物がえられることであり、また国民経済的収益性とは、その貨幣的表現つまり外国貿易によつてえられた純収入 *Reineinkommen* である。第三は経済的利用効果を更に分割したもので直接的経済的利用効果 *direkte ökonomische Nutzeffekte* と間接的経済的利用効果 *indirekte ökonomische Nutzeffekte* である。直接的経済的利用効果とは国際的商品交換によつて社会的労働が節約されることである。また間接的経済的利用効果とは、労働手段あるいは労働

対象が輸入されることによって労働生産力が増大し、あるいは現存の生産能力が拡大することである、したがって国民経済的収益性も内容的には直接的経済的利用効果からえられた純収入（チェルニアンスキの国民経済的収益性がこれに相当する）と間接的経済的利用効果からえられた純収入とにわかれる^⑥。これを図示すれば大要次のようである。



その他 R・ブラウアや G・グレービツヒなどもこの問題を論じているが内容的にはチェルニアンスキーやチーレの見解の部分的修正乃至その一層の補足、精密化である。

次に外国貿易の効用の量的測定法についてみてみよう。社会的効果や総効用を量的に表現することが困難であることは論者の間で一致している。経済的效果については、間接的效果となすけられるような内容のものについては、これを正確に数字的に計算することはむずかしいとブラウアもいつているし^⑥。また私の知るかぎり誰もこの計算式をみちびいていない。ただ直接的效果と名づけられるものあるいは国民経済的収益性に関しては多くの人がその計算式をみちびいていて、そしてその主要視角は名論者とも殆ど同じで、ある財の輸出（あるいは輸入）が収益的であるかないかは、その財を国内で生産するに要した労働（国内価値）とその国際的評価（国際価値）との比率で算定しうるものと考えている。これらの計算式を二、三紹介してみよう。

ニクリン式

$$e = \frac{h}{g}$$

e = 為替対価

h = 輸出品に含まれているところの国内で生じた生ける及び死せる労働の支出

g = 為替利得（純輸出価格－輸入された原料及び半成品の為替価値）

ニクリンの式は輸出品に含まれている国内労働がどれだけの外貨手取を得るか（国際的評価をうけるか）を示したもので、e のつまり為替対価 Devisengegenwert の値が一より小さければ小さいほど「この商品の輸出は有利であり⑦」収益性も高いと考えられている。

チェルニアンスキー式

$$\frac{S_k - IM_{sGCP}}{E_r P - IM_{E_r P}} \times 100 \quad (1)$$

$$\frac{S_k - A_k - IM_{sGCP}}{E_r P - IM_{E_r P}} \times 100 \quad (2)$$

$$\frac{S_k - M_{sGCP}}{E_r P - M_{E_r P}} \times 100 \quad (3)$$

S_k = 原 価

IM_{sGCP} = 当該生産物中に含まれている輸入材料を国家卸売価格であらわしたもの

$E_r P$ = 当該生産物の世界市場価格

$IM_{E_r P}$ = 当該生産物中に含まれている輸入材料費の世界市場価格

A_k = 当該生産物の生産に使用された材料費の中に含まれている利潤部分

M_{sGCP} = 生産の最終段階において当該生産物の中に入り込むところの全材料費

$M_{E_r P}$ = 同じものの世界市場価格

チェルニアンスキー式はニクリン式とその意味するところにおいて同じである。(式の値が小さいほど当該生産物の輸出収益性は大きい)ただ相違するところは第一に、チェルニアンスキー式が社会主義経済に特徴的な利潤の人為的規定による価値と価格の背離を考慮して、分子に生産物価格(価値)ではなくして、利潤部分を差引いた S_k // 原価をもってきていること。(2)式では更に徹底して材料費の中に含まれている利潤部分まで差引いている(第二に、(3)式にみられるように、材料に含まれている過去労働(死せる労働)をすべて除外して、ただ最終加工労働(生ける労働)のみを計算の対象としていること^⑧。(なおチェルニアンスキーは引用された計算式の他に輸入収益性の計算式を若干展開しているが、式の本質に変わりがないのでここでは省略した)

ハンガリー式

$$\frac{O - a_1}{E - a_2} = \frac{r_1}{r_2}$$

O = 原価 (生産物価格 - 取引税 - 企業利潤)

a_1 = 生産物中に含まれている原料の国内価格

E = 純輸出価格 (輸出価格から手数料その他を差引いたもの)

a_2 = 生産物中に含まれている原料の為替価格

r_1 = 賃金及び国消費 (減価消却を含む)

r_2 = 賃金及び国消費の国内支出に對する純為替額

ハンガリー式はチェルニアンスキの(1)式を發展させたものである。あるいは(3)式を少し緩和したものである。すなわちチェルニアンスキの(1)式では原価から差引かれているのは輸入材料のみであるが、ここでは生産物の中に含まれている原料の全部が輸入されたかあるいは国内の他部門からきたかを問わず差引かれている。つまり、当該生産物の収益性を純粹にみながために、他部門に關係する生産物(原料)を除外しようというわけである。

以上が、東欧諸国を中心とする社会主義諸国における外国貿易の効果及びその量的計算式の代表的見解であるが、しからば中国においてはこの問題はどのように考えられているのであろうか。以下項をあらためてみることにしよう。

- ① レーニンはこのことについて次のようにいっている「われわれがジェノヴァに行くのはもちろん共産主義者としてではなく商人としてである。われわれは貿易をしなければならぬし、彼らも貿易をしなければならぬ。われわれは自分の利益になるように貿易をやりたいと思っており、彼らも自分の利益になるようにしたいと思っている」 B. И. Ленин, Соц., т. 33, стр. 216, 訳二六六頁

- ② たとえば R. Brauvr, E. Faude, G. Fröhlich, G. Gräbig, H. Junker, U. Mehlhahn, I. Mervart, H. J. Nitz, G. Otto, W. Rudolf, B. Scheel, G. Seidel, E. Süß, R. Thiele, P. Thal, H. Voss などである。

- ③ 拙稿『社会主義貿易に関する二つの問題』一橋大・経済研究第十一卷第四号、同『社会主義における外国貿易の利益について』山口大・東亜経済研究第三集
- ④ V. Černiansky, *Der Aussenhandel*, Nr. 7/57 u. 15/57.
- ⑤ R. Thiele, *Zur volkswirtschaftlichen Rentabilität des Aussenhandels*, *Wirtschaftswissenschaft*, Heft 3/1958.
- ⑥ R. Brauer, *Zur Frage des volkswirtschaftlichen Nutzeffekt des Aussenhandels*, *Wirtschaftswissenschaft*, Heft 3/1958.
- ⑦ I. Nykyn, *Organisation und Technik des Aussenhandels*, 1957, s. 305.
- ⑧ V. Černiansky, *Fragen der volkswirtschaftlichen Rentabilität des Aussenhandels*, *Wirtschaftswissenschaft*, Heft 4/1957.
- ⑨ E. Faude, *Zu den Rentabilitätsuntersuchungen im Aussenhandel der Volksrepublik Ungarn*, *Der Aussenhandel*, Nr. 12/1960.

二

中国のこの問題に関する研究は東欧諸国ほど多くは見られない。わたくしの知る限りでは、イアオ・イースウの前述の学会での発言記録と、東独誌『外国貿易』に寄稿したシャン・シュウスイ及びシュウ・ジョンジュンの論文『外国貿易の収益性』があるだけである^⑩。しかし東欧諸国においても、シャンらの論文は「北京大学の支配的見解」——編輯者の序文——とみなされており、したがってまたこれを中国の代表的見解とみて大過ないであろう。

中国の見解の特徴は、第一に、社会主義貿易が社会主義的生産関係によって規定されているという点を特に強調すること。第二に、貿易の役割がそれぞれの国の歴史的具体的条件、経済発展段階の相違によって規定されるという面を強調すること。第三に、社会主義世界体制全体の発展という観点から社会主義貿易をみるべきことを強調することである。先ずイアオ・イースウの当学会での発言をきいてみよう。彼女は次のようにいっている。

外国貿易の本質を時間の節約に帰することは誤っている。外国貿易は当該国民経済の主要課題にもとずいて展開さ

れる。これは発展段階によって異なる。外国貿易はこの種々異なった課題を成就するということに従属する。つまり外国貿易の分析は時間の節約という立場からのみ行う訳にはゆかない。むしろ外国貿易の効用の評価は次の三つの観点から考察されるべきである。(1)その国の経済的課題、(2)社会主義諸国の経済協力、(3)資本主義諸国との経済関係である。

またシャン・シュウスウ及びシュウ・シヨンジュンは前掲の論文で次のように書いている。

「われわれの考えは次のようだ。社会主義経済体制が外国貿易の本質を規定するという事。そして抽象的な、経済体制に依存しないような、そのような外国貿易の本質は存在しえないということ。たとえ外国貿易が社会的労働を節約する重要な手段であるとしても、社会主義国の外国貿易の全本質をただそれだけでいいあらわすことは出来ない。……」

社会主義貿易の現実を評価する場合には次の三つの側面から考察しなければならぬ。

自国の経済的課題

兄弟国との経済協力

資本主義国との経済関係

人はそれぞれの国、一定の時代、現行の経済課題、国際分業の異なる発展段階、及び時々の異なる内的外的条件に応じて、現在の具体的状況と将来の発展の可能性を審理しなければならぬ。人はただ当該国の立場からだけでなく、また社会主義世界体制の生産力の発展から出発しなければならない。人がこの問題を全体的な発展的な観点から考察する時にのみ、社会主義貿易の現実の全面的考察に到達するだろう^②」

このような見解にたつならば、社会主義国の外国貿易はこれを単に現在の社会的労働を節約するという観点からだ

け評価することは全く不十分になる。たとえば経済的におくれた社会主義国は、何よりも「資源の開発」のために、その国の「重工業化」のために、また「技術水準の向上」のために、貿易をすべきである。つまり「生産力の将来の発展」という観点から貿易を考えなければならない。この場合には個々の貿易の直接の労働節約の問題は従属的なものとなる。また資本主義国との貿易の際には社会主義国が「資本主義国に経済的、技術的に依存することがないよう」に保証されなければならない。また社会主義世界体制の強化、社会主義国民経済の加速度的発展のためには、「社会主義国との分業を利用すべくすべての力をそそがなければならない」。このように社会主義外国貿易を全面的側面から考察するときのみ長期的観点にたった「社会的労働の真の節約」が可能となるのである。

もつともシャンらも外国貿易がもつ直接の社会的労働の節約効果の重要性を無視するわけではない。彼らはいっている。

「たとえばこれらの国（後進社会主義国 I S）においては、その国民経済の主要課題が社会主義工業化であり、そしてこのことが労働生産性の将来の高揚に役立つとしても、この目的を最大可能な僅少の社会的労働の支出でもって、達成するよう考慮すべきである^③。」

この観点からしてシャンらもチュルニアンスキーらが問題にした外国貿易の効果とその量的計算式について検討し分析をすすめている。シャンらは「外国貿易の国民経済的収益性という概念は外国貿易の効果一般よりはるかに狭義なものである。それはただ一定時期における状態にのみ関係するのであり、外国貿易の効果のただ一部分であり、全経済的要素は勿論のこと全経済的要素のすべてもまた完全には含まない」というチュルニアンスキーの見解に賛成している。そしてかれら自身も外国貿易の国民経済的収益性を「他国との商品交換によってその国の社会的労働のある節約を達成すること」と定義している。そしてまた外国貿易の国民経済的収益性を数字的に表現することが可能

であり、表現された指数はそれが正確なものである限り、その意義に一定の限界があるとはいえず、「社会主義外国貿易の効果の評価する上に、一国の輸出及び輸入構造を確立する上に、また社会主義国の分業を協議する上に、その基礎として役立つ」としている。

では、外国貿易の国民経済的収益性を数的に表現するにはどうしたらいいのか、これがシャンらの次の問題となる。彼らも東欧諸国の論者と同じように、この計算式は、国内で生産するに要した労働（国内価値）とその国際的評価（国際的価値）との比によって求められるものと考えている。しかし両者の間の共通性はここまでである。チェルニアンスキー式やハンガリー式が社会主義経済における利潤の人為的規定を考慮して利潤部分を除いた原価を対象とし、また原料価格を差引いているのに、シャンらはその式に利潤部分＝蓄積部分も、原料費をも算入している。彼らによると理由はこうである。成程チェルニアンスキーらが、社会主義経済における計画価格の特種性、特にその利潤部分の人為的規定を考慮して、国内価格の直接的比較を避けたことは正しい。しかし、だからといって利潤部分＝蓄積部分を完全にのぞいてしまうのは正しくない。なぜならば比較されるべきは生産物価値 $C+V+M$ であって原価 $C+V$ ではないからである。成程、 $C+V$ と M の比が生産物によって、また国によって等しいならば $C+V$ の比が $C+V+M$ の比を代位しうるが、そのようなことは現実問題としてありえない。したがって、除かるべきは利潤部分の人為的規定による歪曲された価格、つまり価値と価格の背離であって、利潤部分＝蓄積部分そのものではない。また当該生産物を生産するに要した労働は単に生きた労働だけではない。死せる労働も入るのである。原料資源の豊富さあるいは貧弱さがその生産物価値に大いに影響し、社会主義国際分業の立地条件選定にも当然考慮されなければならない。したがって収益性の計算式に原料費も当然算入しなければならない。

次いでシャンらは自分たちで次のような収益性計算式を展開している。

$$P_s = \frac{C + V + \frac{V \cdot RA + DTE}{1 - RA}}{P_s - FTE}$$

P_s = 収益性

C = この商品を生産する際の材料費

V = 賃金

RA = 平均蓄積率 $(\frac{M}{V+M})$

DTE = 国境内での商業費

P_s = 外国において達成された価格 (本国通貨に換算)

FTE = 外国での商業費

この式の意味するところは当該生産物を生産するに要した本国労働 $C + V + M$ とそれが外国においてうける評価との比である。この式の値が一より小さければ小さいほどこの商品の輸出収益性は大きく、したがってその輸出は有利である。この点他の収益性計算式と結果において同じである。シャンらは設例をもうけてこの公式の利用方法を説明している。彼らがいかに苦勞して計画価格による歪曲された価格を是正しようとしているかがうかがわれるので、少し長くなるがこれを引用してみよう。

ガラスが輸出品として適しているかどうかをみるためにその収益性を調らべる。(数字は仮定されたもの)

(A) 塩一単位当り生産費

(a) 塩1単位当りの原価と価値 (単位は「元」以下同じ)

賃金 329

電気代その他 357

総原価 686

塩単位当り価値 = $C + V + M = 357 + 329 + 86.9 = 772.9$

(但し $RA =$ 当該年の平均蓄積率 = 20.9% $\therefore M = \frac{V \cdot RA}{1 - RA} = 86.9$)

純粋の水酸化ナトリウム 1 単位をつくるためには 1.9 単位の塩を必要とする。

塩 1.9 単位の価値 = $772.9 \times 1.9 = 1468.5$ (1)

(b) 麻袋 1 単位当りの原価と価値

原料及び最重要材料	79.5
補助材料	2.6
賃金	7.9
電気代その他	13.2
総原価	103.2

麻袋 1 単位当りの価値 = $C + V + M = 95.3 + 7.9 + 2.1 = 105.3$

(M の計算は (a) の場合と同)

麻袋 12.5 単位の価値 = $105.3 \times 12.5 = 1316.3$ (2)

(c) 純粋の水酸化ナトリウム 1 単位当り原価と価値

原料と最重要材料	5,725
補助材料	4,399
賃金	1,353
電気代その他	2,308
総原価	13,785

この場合、原料と最重要材料費は次のように訂正されなければならない。すなわちこのうち塩の価額を4,942とすると塩以外のこの項目の価額は5,725-4,942=783となる。塩の正しい価額は(1)より1,468.5であるから、この項目の価額は783+1,468.5=2,251.5となる。同様に補助材料費も次のように訂正される。このうち麻袋価額を2,119とすると麻袋以外の価額は4,399-2,119=2,287、麻袋の正しい価額は(2)より1,316.3であるからこの項目の価額は2,287+1,316.3=3,603.3となる。

故に(c)は次のように訂正される。

原料と最重要材料	2,251.5
補助材料	3,603.3
賃金	1,353
電気代その他	2,308
総原価	9,515.8

したがって、水酸化ナトリウム1単位の価値=C+V+M=8,162.8+1,353+357.5=9,873.3

(Mの計算は(a)の場合と同様)

ガラス1単位生産のために水酸化ナトリウム0.1037単位を必要とする。その価値は
 $9,873.3 \times 0.1037 = 102.4$ (3)

(d) 木板1単位の原価と価値

原料及び最重要材料	8,713
賃金	370
電気代その他	368
総原価	9,451

木板 1 単位の価値 = $C + V + M = 9,081 + 370 + 97.8 = 9,548.8$

(Mの計算は(a)の場合と同じ)

ガラス 1 単位の生産のために木板 0.02517 単位を必要とする。その価値は

$$9,548.8 \times 0.02517 = 240.3 \quad \dots\dots\dots(4)$$

(e) ガラス 1 単位の原価と価値

原料及び最重要材料	311
補助材料	400
賃 金	65
電気代その他	240
総 原 価	1,016

この場合、原料及び最重要材料費は次のように訂正されなければならない。すなわちこのうち水酸化ナトリウムの価額を 278 とすると、水酸化ナトリウム以外のこの項目の価額は $311 - 278 = 33$ となる。水酸化ナトリウムの正しい価額は(3)より 102.4 であるから、この項目の価額は $33 + 102.4 = 135.4$ となる。

同様に補助材料費も次のように訂正される。このうち木板の価額を 290 とすると木板以外のこの項目の価額は $400 - 290 = 110$ 、木板の正しい価額は(4)より 240.3 であるから、この項目の価額は $110 + 240.3 = 350.3$ となる。

故に(e)は次のように訂正される。

原料及び最重要材料	135.4
補助材料	350.3
賃 金	65
電気代その他	240

総原価 790.7

したがってガラス1単位の価値=C+V+M=725.7+65+17.2=807.9

(Mの計算は(a)の場合と同じ)

(f) ガラス1単位の輸出価値=価値+輸出費用=807.9+272=1,079.9

『元』の為替相場で還算されたFOB価格は671

∴ $P_e = 1,079.9 \div 671 = 1.61$

かくして、この例ではガラスは輸出品としては収益性という観点からすれば不適である。というのは一より値が大きいから。つまりガラス輸出によって、一・六一元分の国内労働が一元分にしか国際的には評価されないことになっているからである。

最後に国民経済収益性の計算式において、シャンら中国の見解が正しいか、それともチェルニアスキーら東欧諸国の見解が正しいかについて一言ふれておこう。明らかに純理論的にいえば蓄積部分を算入することが正しい。しかしチェルニアスキーらもこのことは認めているのであってただ問題は人為的計画利潤をいかに処置するかということである。このことを考えるとシャンらの平均蓄積率と賃金から蓄積部分を算定する方式はかなり大まかなものであり、その信憑性は疑わしい。また原料費を入れるか入れないかの問題は、それぞれ一長一短はあるが、二重計算をさけるためにはさし引いた方が無難である。いずれにしても計算の複雑性から考えると中国式は東歐式にくらべて実用性にとばしいようだ。

① Shan Shu-szu, Sü Shön-djin, Die Rentabilität des Aussenhandels, *Der Aussenhandel*, Nr. 12/1959 u. 14/1959.

尚右論文は中国の経済学雑誌『外国貿易研究』一九五八年一月号に掲載されている。またシュウは北京外国貿易研究所の外国貿易部門の部長であり、またシャンは同研究所の社会主義貿易講座の主任である。

② a. a. O., Nr. 12/1959, S. 22.

③ a. a. O., S. 23.

三

以上述べたような外国貿易の効果あるいは国民経済収益性が中国の現状においてどのようなにあらわれているか、これを次にみてみよう。

(一) 社会的政治的效果

この効果は非常に多面的である。たとえば社会主義国の対後進国貿易がその国の民族的独立に貢献し、世界の反帝国主義戦線の強化に役立つということ、そしてこのことがまた社会主義国の国際政治舞台における地位を強化するということなどもある意味ではこの効果の中に数えあげられよう。しかしはやり外国貿易がもたらす文化・科学・技術交流の発展、特に当事国間の平和的關係の強化とこれを通しての国際的平和気運の助勢がこの効果の最も重要なものであろう。このようにみると、中国における貿易の社会的政治的效果は、ソ連邦や東欧諸国にくらべて決して小さくないしむしろ大きいであろう。何故なら中国は社会主義国としては後れて建設に入った国であり、科学、技術の急速な発展を他の社会主義国以上に要求しており、また国防費その他の不生産的支出の最大限の節約を要求するような状況にあるからである。更に政治的経済的にソ連や東欧諸国にくらべて国際的に資本主義諸国から冷遇されているからである。

(二) 経済的效果

経済的效果はこれを大きく分類すれば、(a)外国貿易によってお互に必要な労働手段、労働対象を取得し、このこと

第1表 中国の輸入品構成

	生産手段	消費資料
1950	87.2%	12.8%
1951	83.1	16.3
1952	90.6	9.4
1953	93.0	7.0
1954	92.8	7.2
1955	94.5	5.5
1956	92.4	7.6
1957	92.7	7.3
1958	93.7	6.3

資料・『偉大な10年より』

第2表中・ソの輸出品構成の比較

	ソ連	中国
	1950	1955
	%	%
機械及び設備	10.6	30.7
鉄	5.2	10.9
非鉄金属	0.8	1.7
ケーブル・電線	1.7	0.1
石油及び石油製品	2.9	10.6
化学製品及び肥料	1.8	0.8
紙	1.0	0.9
綿花	0.4	—
木綿織物	0.96	—
砂糖	1.1	—

資料・ И. Верещагин, В. Рыбалкин, О закономерностях экономического развития мировой социалистической системы, 1961, стр. 144.

によってその国及び他の社会主義国の生産能力及び生産性を拡大すること、(b)外国貿易が国際分業を通してあたえる直接的な労働節約効果、つまり外国貿易の収益性、の二つに分つことが出来よう。(a)も(b)もその国の生産力をたかめ蓄積力をたかめる。ここでは(a)について述べよう。

一国が(a)の効果をもどの程度享受しているかを数字的に直接はしき出すことは困難である。ただ次のことはいえるであろう。一国の輸入額中に生産手段の占める割合が高いほど他の事情に変化が無い限り(a)の効果は大きいということ。同様にこの国の輸出額中に生産手段の占める割合が高ければそれだけ他の社会主義国にあたる(a)の効果も大きいということ。そこで中国の状況をみてみると第一及び第二表にみるように輸出入ともに生産手段の占める割合が高いことが知られる。つまり(a)の効果は自国にとっても、他の社会主義国に対しても小さくないということになる。なお中国の貿易額中对社会主義貿易の占める割合は一九四八年—四一・〇%、一九五三年—八〇・〇%、一九五七年—七二・〇%、一九五八年—七二・〇%、一九五九年—七四・三%で、大体他の社会主義国の中間に位している。

また(a)の効果は一国の貿易依存度が高ければ高いほど大きいことは自明である。この点中国はどうか。第三表にみるように大体一〇%前後である。これはソ連の貿易依存度四%（一九五八年^①）より高いが^②、他の社会主義諸国よりも低い。

(a)の効果を一国だけの立場からみるならば、(a)の効果は直接には輸入によってえられ、輸出は単にこのための手段となるから輸出超過国より輸入超過国の方が有利となる。つまり社会主義国家間では輸出超過国は輸入超過国に一種の「援助」を与えていることになる。この点が資本主義国家間の貿易と社会主義国家間貿易（および東西貿易）との間の重要な相違である^③。中国の対ソ貿易収支が新中国成立後数年の間入超であったのは、それだけ中国側に(a)の効果の効果が片寄っていた、つまりソ連側の「援助」があったことを意味する。（もっともソ連側の出超をソ連の『衛星国』への高価格輸出『衛星国』からの低価格輸入にもとめる見解がいわゆる『客観的』経済学者たちによって支持され、宣伝されているが、これを文字通りうけとるわけにはいかない。これについては後述する）その後、反対に中国側が出超となったのは、これまでのソ連の「援助」に対する返済、つまりこれまでの中国側に片よっていた(a)効果を是正するためと考えられる。勿論、将来、(a)効果を平等に分与しあうためにもまた計画貿易をノルマルに遂行するためにも、貿易収支は均衡化することが望しいわけである。なおこれまでのところ（一九五七年までのところ）中国の対資本主義国貿易は一貫して出超であるが、このことは、中国にとって(a)効果が不利に反対に資本主義国側に有利に作用してきたことを物語っている。しかし第六表にみるように社会主義圏全体としてみても対資本主義国貿易は出超とな

第3表 中国の貿易依存度 (%)

年次	貿易依存度	
1952	(1) 10.1	(2) 10.6
1953	10.9	11.6
1954	10.5	11.5
1955	12.8	14.0
1956	11.5	12.2
1957	10.6	11.2
1958		10.3
1959		9.8
1960		9.8

資料 (1)は『日中貿易白書』131頁より
 (2)は米沢秀夫『中国対外貿易の動向』アジア経済旬報1961年5月中旬号、7～8頁より

第4表 中国の対ソ貿易収支 (単位100万ルーブル)

	1950	1952	1954	1955	1956	1957	1958	1959
輸出	765.1	1,655.0	2,313.4	2,574.0	3,056.9	2,952.5	3,525.0	4,401.0
輸入	1,552.8	2,216.9	3,037.1	2,993.4	2,932.1	2,176.4	2,536.0	3,818.0
差額	-787.7	-561.9	-723.7	-419.4	124.8	776.1	989.0	583.0

資料・M. И. Сладковский, Советско-китайское экономическое сотрудничество, *Проблемы Востоковедения*, №. 3. 1960, стр. 113.

第5表 中国の対資本主義圏貿易収支 (単位100万ドル)

	1952	1953	1954	1955	1956	1957
輸出	368	433	375	494	627	610
輸入	273	289	294	317	433	516
差額	95	146	81	177	194	94

資料・1952~56年にバトル報告、57年のみ国連 Direction of International Trade.

第6表 東西貿易のバランス (単位100万ドル)

	東から西へ	西から東へ	差額
1950	1,540	1,458	+82
1952	1,611	1,282	+329
1954	1,761	1,651	+110
1956	2,802	2,290	+612
1958	3,321	3,139	+182
1959	3,506	3,352	+144

U. N. Monthly Bulletin, June 1960.

利であるからである。この他社会主義国との貿易額が相対的に少く、入超が国内経済に強い影響を与えないといったような理由もあろう。が、いずれにしても、中国やソ連を含め、社会主義国側から常に貿易収支均衡化要求が叫ばれているのは、若干の例外はあるとはいえ、大体いずれの国の東西貿易でも共通している事実のようだ。

(三) 国民経済的収益性

国民経済的収益性は経済効果のうちの(b)、つまり外国貿易による直接の社会労働の節約をさす。ところでこれまでに紹介し

っている。つまり資本主義国にとっては社会主義国との貿易に関する限り、入超を不利とは考えていないのである。なぜなら入超による自国の債務的従属化はないし、反対に出超による相手国の債務的奴隷化も不可能であるとすれば(a)効果の大きい方がむしろ有

てきた収益性計算式をみればわかるように、ある財の収益性の値は第一に、その財の原価あるいは計画利潤を調整して得られた国内価格と、その輸出あるいは輸入価格（世界市場価格）との関係によって、第二に、為替相場によって規定される。国内価格はそのままでは関係しない。（それ故に、社会主義国の国外価格と国内格価を比較してみても、前者の後者より低いことから、社会主義国の貿易は輸出において不利であり、輸入において有利であるとする俗論は支持し難い）中国における輸出あるいは輸入財の原価をそれぞれについて調べることは資料の関係上ここでは避けざるを得ない。勿論、計画利潤を調整して得られた価格を導き出すことは一層困難である。ただ輸出入価格（世界市場価格）については、非常に限定された数字を基礎としてではあるが、それが中国の貿易に有利に作用しているか不利に作用しているかに関しては輸出入価格の対比を通して大体の動向だけは知ることが出来る。

先ず中国の外国貿易において全体の約五割を占めているソ連との貿易をみてみよう。葉季壮氏の見解によれば、一九五六年は一九五九年に比し、中国の対ソ輸出品は羊毛、米、桐油、ジュートにおいて一〇〜三〇％下落、大豆、紅茶、生糸、スズ、タングステン鉱において一〇〜一六〇％上昇。中国の対ソ輸入品は重油、ガソリンにおいて殆んど変動なし、機械設備、厚板鋼、型鋼において三〇〜一四〇％の上昇である。また中ソ間の契約価格を比較すると高いものも低いものもあり、この数年間中ソ貿易の価格は中国側になんらの損失もなく公平、合理的であった^④。同じことを資本主義世界市場の価格との対比においてソ連の輸出価格という側面からみてみよう。国連の『世界商品年報』によってみても、ソ連の対社会主義国の輸出価格は世界市場価格に比して相対的に高くなりつつあるとは言いがたい。サヴォヴムの資料によれば絶対的にみてもソ連の輸出価格の方が世界市場価格よりも重要商品において低くなっている（第八表）。またアジア政経学会編『中国政治経済綜覧』昭和三七年版が『ソ連貿易統計年鑑』一九五五〜五九年版を基礎資料として中国の対ソ交易条件を算定しているが（第九表）、これで見ると、ラスパイレス式では動揺がはげし

第7表 ソ連の対社会主義国輸出単価指数
(1955年=100)

	世界市場価格		ソ連の輸出価格	
	1956	1957	1956	1957
瀝青炭	125	139	121	154
鉄鉱石	108	120	192	125
原油	94	102	98	97
銅	102	80	103	81
鉛	100	92	98	89
亜鉛	105	95	98	92
アルミニウム	106	111	105	121
錫	108	105	71	70
小麦	100	97	98	96
綿花	92	86	99	88
たばこ	100	107	84	110
植物油	107	106	112	111
砂糖	101	119	122	126
大麦	100	93	100	99

資料・国連『世界商品年報』(1958年)より

第8表 ソ連の対社会主義国輸出価格と資本主義世界市場価格との対比
(トン当りドル)

商 品 名	資本主義世界市場での価格	社会主義世界市場での価格
無煙炭	25.3	22.1
重油	18.4	16.5
苛性ソーダ	80.8	73.0
無水炭酸ソーダ	39.1	35.8
燐灰石	18.0	16.5
綿花	846.8	793.8
マンガン鉱石	64.0	52.6
鑄鉄	67.9	64.0
精製砂糖	151.1	130.4

資料・H. Савов, Две мировые системы хозяйства, 1961 стр. 154.

い。く、パーシェ式では五八年までは上昇をつづけているが、五九年だけはいちぢるしく低下している。いずれにしても両者の間の差が大きすぎ、一つの傾向をこの表からみちびくことは無理である。このような事実をみれば、中国の対ソ交易条件が段々悪化しつつあるとか、あるいは、資本主義国とのそれにくらべて不利であるという主張はそのままで支持出来ないであろう。なお対資本主義国貿易の交易条件その他については資料の関係上これを知ることが出来ない。

第9表 中国の輸出入単価・交易条件指数の変化 (1955=100)

	1955	1956	1957	1958	1959	対象商品数
輸出単価指数 (ラスパイレス式)	100	100	101.3	96.7	93.1	10品目
輸出単価指数 (パーシエ式)	100	114.3	126.4	116.3	59.6	10 //
輸入単価指数 (ラスパイレス式)	100	115.6	97.0	113.2	128.2	26 //
輸入単価指数 (パーシエ式)	100	104.2	115.8	89.8	100.5	26 //
交易条件指数 (ラスパイレス式)	100	86.5	104.4	85.4	72.6	
交易条件指数 (パーシエ式)	100	109.5	109.3	129.3	59.3	

資料、アジア政経学会、中国政治経済綜覧、昭和37年版 704頁

次に貿易の収益性を規定する第二の要因たる為替相場についてみてみよう。中国の場合、ソ連や東欧諸国の場合のように金平価を規定し、これとの関係において為替レートをきめるというようなことをしていない。(もっともコールマイがいうように「われわれの金内容の大きさの決定は社会主義陣営の諸国の物価比較調査(生産手段、消費財、サービスの)から出てきたものである^①」から、東欧諸国における金平価がどの程度積極的意義があるかは問題である)中国の対外為替レートは表にみる通りであるが、このレートが過高評価であるかそれともその反対であるかをきめる十分な資料はない。しかし香港のヤミ場がその公定相場よりいくらか元安であるところをみると、対資本主義相場はやや過高評価のようだ。もっとも日中貿易などに示されているように、貿易品の価格からみて、非常に過高評価ということも考えられない。が、いずれにしても為替レートの問題は今後一層深く検討される必要がある。

① Alec Nove, Trade with Communist Countries, 1960, p. 30.

② 但し人口一人当り貿易額ではソ連の方が高い。すなわち一九五七年において人口一人当り貿易額はソ連一六六ルーブル、中国一九ルーブルとなっている。▲世界経済と国際関係誌一九五九年四号三一頁

第10表 中国の為替レート (1959年7月1日)

国名	基準	中国銀行 買相場	貿易外	国名	基準	中国銀行 買相場
ソ連	100ルーブル	50.0元	16.67	セロ	100ルピー	51.6
ポーランド	100ズロチ	50.0	11.11	インドネシア	100ルピア	51.6
ハンガリー	100フオリント	27.0	14.37	スウェーデン	100クラナ	14.0
ブルガリア	100レフ	17.0	11.9	デンマーク	100クローネ	56.3
アルバニア	100レク	33.3		西ドイツ	100マルク	35.4
東ドイツ	100マルク	29.4	18.73	スウェーデン	100クラナ	58.6
朝鮮	100ウォン	4.0		日本	100円	0.7
モンゴル	100トウグルク	89.9	43.44	ノールウエー	100クローネ	0.6
北ヴェトナム	1.7元	12.5		スウェーデン	100クローネ	34.3
ユーゴスラビア	100ダイナール	50.0		モロッコ	100アラント	47.4
イギリス	100ポンド	1.0		イラン	10,000アラント	58.3
マラヤ	100チャット	685.9		香港	100ドル	685.9
インド	100ルピー	80.6		アメリカ	100ドル	42.7
		51.6				243.3
		51.6				

資料、アジア政経学会編「中国政治経済総覧」昭和35年版 590頁
なお社会主義国の場合は売・買の差はない。

③ このことはまた次のこととも関係している。すなわち資本主義国においては入超あるいは出超は、しばしば通貨↓金融↓投資↓物価等への作用を通して国内経済に攪乱的影響をあたえる。特に入超の場合は、投資活動、生産活動を制限しようとするデフレ的傾向が生まれやすい。この傾向は最高利潤を追究するためにたえず「拡大せよ蓄積せよ」という至上命令を實行している資本の特にいみ嫌う傾向である。(もっともこのような貿易収支の国内経済への影響を通していわゆる貿易乃至国際収支の自動調節作用が生じるのである)しかるに貿易及び為替の国家独占を實行し、貿易の通貨、金融、価格にあたえる作用を通しての国内経済にあたえる攪乱的影響を遮断している社会主義国にとっては、入超にしても出超にしてもこれらは直接には何ら国内の計画経済を攪乱することは出来ないのである。一言でいえば、国際収支なり貿易収支なりのいわゆる自動調節作用は、ここではその力を失い、計画によって代位されているのである。

④ アジア経済研究所編『中ソの貿易組織』一五六―七頁

⑤ G・コールマイ『ドイツ民主共和国の貨幣制度』ベルリン一九五六年